

## 音楽表現の指導法に関する一考察

岡田 泰子<sup>1)</sup>・富沢 杏安音<sup>2)</sup>・杉山 祐子<sup>1)</sup>

### A Study on Teaching Method of Music Expression

Yasuko OKADA, Ayane TOMIZAWA, and Yuko SUGIYAMA

本学幼児教育学科では、1年次において、「音楽表現活動Ⅰ」を開講している。この科目は保育士専門科目、保育内容「領域表現」に相当し、幼稚園教諭第2種免許、および保育士資格の必修科目である。授業内容は、未来の保育者に必要とされる、学生自身の表現力を培うことを目的とし、「歌唱」「器楽」「リトミック」の3つの分野で構成している。また、それぞれの分野別に3名教員が分担で担当し、学生はこの3分野を毎週ローテーション形式で受講している。各教員は連携しながら指導に当たっているが、このような授業構造が、学生にどのような効果をもたらしているのか、「音楽表現活動Ⅰ」の現状をまとめ、検証することとした。

キーワード：音楽、表現、指導法、ローテーション

#### I. はじめに

幼稚園教育要領第2章「表現」及び保育所保育指針第3章「表現」として、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」とある。また、「ねらい」として「(1)いろいろなものの美しさに対する豊かな感性を持つ」「(2)感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」「(3)生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ」とある。また普光院(2015)は、音楽に親しんだり、歌を歌ったり、楽器を使ったり、いろいろな素材にふれたり、描いたりつくったりして、自分なりに表現すること、工夫することを楽しむ気持ちを育むと説明している。

「音楽表現活動Ⅰ」は3名の教員で「歌唱」「器楽」「リトミック」の3分野で授業展開されている。本論では、その現状を報告すると共に、課題を述べることとする。

(岡田)

#### II. 「歌唱」における授業の現状

保育の現場において、「歌う」ということは日常生活の一部であり、歌を伝えることは、保育者にとっても必要不可欠と考える。子どもたちの音楽表現力を培うためには、まず保育者自身が音楽表現を理解し、楽しみながら実践する必要があるだろう。(坂田・山根・伊藤2009)では、保育者に必要と考えられる音楽的知識・技能には「手遊び歌や遊び歌に対する知識」「保育者の弾き歌いの技能」「保育者自身の歌い方や声の表現方法」また、保育の際に必要なと考えられる指導方法では「手遊び歌、遊び歌を用いた指導方法」「弾き歌いを用いた指導方法」と歌に関することが上位を占めていたと報告している。また、本年(2017)の全国大学音楽教育学会で発表された「保育者に求められる音楽能力について」(若谷)では、新任保育者に求める音楽能力について「手遊びを沢山知っている等手遊びの実践力」が1番に求められていることや、養成校の音楽の授業で取り扱ってほしい内容について1位「手遊びについての実践力」2位「歌や音楽遊びの実践力」3位「わらべ歌

1) 短期大学部幼児教育学科 2) 中部学院大学短期大学部(非)

の実践力」と報告されている。このことから、歌で表現すること、また指導出来ることが保育者にとっていかに重要であるかがうかがえる。その一方で、保育者を目指す学生が、音楽を本格的に習っている者は少ない。短期間で本格的な音楽を習得するのは難しいと考える。学生にとって「歌」は幼い頃から慣れ親しみ、また、小学校、中学校、高校を通して合唱をする機会もあったかも知れない。昨今はカラオケなどでも歌う機会の増加が考えられるが、声の仕組みや正しい発声を習ってきているのだろうか。ただ歌が好きで楽しんで歌うのも良いことではあるが、カラオケに沢山行くことで歌が上達するとも言いがたい。そこで、正しい発声方法を知り、正しく歌うことが出来、そして子供たちに伝えることが出来る保育者を目指してもらいたい。音楽を深く勉強したことがない学生にも短期間で習得出来る「歌唱」の練習方法を考え、どこまで理解し、実践出来るかを検証する。またこの実践が保育者を目指す学生にとって有効な音楽表現の養成に繋がっていくのかを検討したい。

## II-1. 方法

### (1) 調査方法

- ・学生1人1人に事前、事後アンケートを配布し、「歌」や「声」で表現することの意識調査を行った。
- ・授業後に自己評価をしてもらい、コメントのやりとりを実施した。
- ・4回目にテストを行い授業の成果を調査した。

### (2) 講義内容

表1 講義内容

項目	内容
呼吸法・発声法	授業の初めに必ず行う。声帯を起こすウォームアップ、腹式呼吸、発声練習。
斉唱	子どもの歌、学歌、讃美歌などを用いて、歌唱技術の向上を目指す。
表情トレーニング	鏡を見て笑顔で歌う。頬骨を上げ、しっかり口を動かす。相手の目を見ながら歌える。
手遊び歌	リズムにのって歌えて動ける。コミュニケーションが取れる。笑顔で歌えて集団で遊ぶ楽しさを知る。
テスト	上記で学んだことを、3回の授業でどこまで出来るかチェックする。

## II-2. 結果と考察

### 1) 事前アンケート結果

103名の学生中101名から得られ、回収率は98.1%であった。

**質問1**「今まで本格的な発声を習ったことがありますか」

「ある」の回答が15% (16名)であった。この中には合唱部やコーラス部に入って習っていた学生や、吹奏楽部で呼吸法を学んだ、演劇部で発声の練習をしていたという学生の回答も含まれていた。

**質問2**「歌うことは好きですか」

表2 質問2「歌うことは好きですか」への回答

回答	好き	まあまあ好き	普通	あまり好きでない	嫌い
人数 (%)	56 (55.4)	30 (29.7)	12 (11.9)	1 (1)	2 (2)

歌うことは「好き」(55.4%)と「まあまあ好き」(29.7%)が約85%を占めており、全体的に歌が好きな学生が多いと推察される。

**質問3**「一人で歌うことは好きですか」

表3 質問3「一人で歌うことは好きですか」への回答

回答	好き	まあまあ好き	普通	あまり好きでない	嫌い
人数 (%)	30 (29.7)	20 (19.8)	26 (25.7)	13 (12.9)	12 (11.9)

**質問4**「大勢で歌うのは好きですか」

表4 質問4「大勢で歌うのは好きですか」への回答

回答	好き	まあまあ好き	普通	あまり好きでない	嫌い
人数 (%)	58 (57.4)	22 (21.8)	13 (12.9)	2 (2)	6 (5.9)

本格的な発声の基礎を学んでいる学生は少ないが、歌うことは好きと推察される。歌い方は一人でも大勢でもどちらでも好きという回答が多くみられた。(表2・表3)

**質問5**「人前で歌うこと話すことは得意ですか」

表5 質問5「人前で歌うこと話すことは得意ですか」への回答

回答	得意	まあまあ得意	普通	やや苦手	苦手
人数 (%)	7 (7)	13 (12.9)	26 (25.7)	28 (27.7)	27 (26.7)

声を出す気持ち良さは多くの学生が感じていることが分かる。「一人で歌うことが好き」(29.7%)「大勢で歌うのが好き」(57.4%)と大勢で歌うことの方が好きな学生が半数以上を占めていた。一人で歌うのが好きと回答した学生のほとんどが大勢で歌うのも好き、あるいはまあまあ好きと回答している中、一人は好きだが大勢では嫌いの回答もあった。歌が好きでない学生は一人で歌うのも大勢で歌うのもどちらも嫌い、あまり好きでないと回答する者がほとんどであった。歌うことが好きな学生は多いが、人前で歌うことや話すことは苦手と回答する学生が半数以上を占めている。(表4)

保育者になれば常に子供たちの前で話し、お手本となって歌を歌わなければならない。人前で堂々と歌える指導も必要であることが推察された。

## 2) -1 呼吸法の実践

筆者が歌う時に常に意識をしていることは、「姿勢」「呼吸」「表情」「発声」「発音」である。そして歌うにあたってとても大切なことが「ウォームアップ」である。歌はスポーツと同じで、まず体と声帯を起し温めることが重要である。最初に歌う時より何度か歌うと声が出てくる。声帯の筋肉が温まり徐々に歌うこと話すことへのベストな状態になる。声帯が起きる前に、無理矢理大きい声を出したり、高い音で歌ったりすると、喉を壊す原因にもなる。そこで学生に声を出す前の「ウォームアップ」を最初に指導する。ウォームアップには簡単な体操とリップロールを指導している。リップロールとは唇を合わせた状態で息を吐き、唇をブルブル振動させる練習方法である。これらの効果は「声帯の血流をよくする」「音程が取りやすくなる」「高音、低音が出しやすくなる」などがある。次に歌う時の姿勢や腹式呼吸、また風船を用いた呼吸練習を行った。

## 2) -2 学生の感想

「小さい頃に何気なく遊んでいたものがリップロールだと知って驚いた。」「リップロールは簡単にいつでもどこでも出来るから良いなと思いました。」「リップロールをした時としてない時では全然違いました。声が出やすくなりました。」などの感想があった。リップロールは即効性があるので、数回の授業で成果を感じる事が出来る学生が多かったようだ。「カラオケの前にやっています。」などプライベートでも実践してくれている学生もいた。簡単に

取り入れやすい練習方法ではあるが、中には出来ない学生もあり、「長く続けられない。」「難しい。音をつけてやるのはとても大変だった。」という意見もあった。例年まったく出来ない学生は数名いるが、諦めない指導をしていきたい。腹式呼吸では「今まで歌う時に腹式呼吸が出来ていなかったので凄く疲れる。」「体がぼかぼか温かくなった。」など熱心に取り組んでくれたことが分かる。「吹奏楽のときは吸えていたけど、歌の時には出来てなかった。歌の中でもしっかりと呼吸がしたいです。」など前向きな感想がほとんどであった。「出来なかった。」「お腹が使えているか分からない。」などの意見もあったが、風船を使用したことで「風船をつかうと分かりやすかった。」「なんとなく分かった。」という意見もあった。

## 3) -1 発声と斉唱

呼吸法を終えたら発声、斉唱を行う。大きい声を意識させるのではなく、綺麗に響く声を目指す。ハミングの発声も取り入れお腹や息の流れを意識づける。

## 3) -2 学生の感想

「歌う前にタイミングよく息が吸えなかった。」「歌の時に腹式呼吸をするのが難しかったです。」「練習での腹式呼吸は出来ても、実際曲になると腹式呼吸が出来ないようだ。また、フレーズ間や短い休符で息を吸うにはスピードが要されるので、そこで苦戦する学生もみられた。」「歌うときに吸うことが大切なことだと分かった。」「こんなに息を使わなければいけないと感じました。」「まだ出来ていない学生がほとんどではあるが、歌う時の呼吸の大切さを感じてもらえたのが分かる。」「本格的に習うのは初めてなので少し難しいところもあるけど、どんどん声が出るようになるのが分かるので楽しいです。」「いつもより高い声が出しやすかったです。」など、数回の授業の中で自分の声の違いが分かる学生や成果を出せる学生もあった。全体的に声帯を温め発声を行った後なので、何も行わず歌う時より声はよく出ていた。

## 4) -1 表情トレーニングの実践

歌うときに大切な顔の表情は、ほとんどの学生が出来ていない。音やリズムを取ることに必死になりすぎて、自分がどんな顔で歌っているか分かっていないのである。曲調や歌詞に合わせて表情を変える

ことがベストだが、保育の現場で使用する歌曲はほとんどが明るい曲ばかりである。まずは笑顔で歌えることが重要だ。鏡を見て笑顔で歌えるか確認。鏡の自分と目を合わせて歌えるか、その顔で相手を見て歌えるか実践した。

#### 4) -2 学生の感想

「鏡を見ながら歌うと自分がいかに笑って歌っていないかが分かりました。」「笑顔で歌うのは意外と難しいと思いました。楽しい時は自然と笑っているのに不思議です。」鏡を見ることでどれだけ笑顔で歌えていないか確認出来たことが分かる。意識をすればするほど自然な笑顔にならず、目が笑っていない、顔が強張ってしまう学生もいた。「笑顔で歌うことで声も少しずつ変わっていくと思いました。」という意見もあった。まさにその通りで笑顔になると口角が上がるので自然に明るい声になる。笑って歌いテンションが上がることで勝手に声が大きくなる利点もある。そこに気付いてくれた学生もいた。「前に立つ人の表情はとても大切だと思うので良い表情で歌いたいと思いました。」「こどもたちが表情を真似してしまうので、音やリズムだけでなく表情にも気を付けたいと思いました。」など将来の自分を想像し、お手本にならなくてはいけない使命感を感じた学生もあった。

#### 5) -1 手遊び歌

手遊びでは、学生に表情を意識し相手の目を見て歌うことを大切にしている。貫う為、学生がよく知っている「げんこつ山のたぬきさん」「むすんでひらいて」「とんとんとんひげじいさん」「おべんとう箱の歌」「アルプス一万尺」を行った。最後に半数以上が知らなかった「鬼のパンツ」の手遊びも行った。一対一で歌い、大きな輪、小さな輪になり相手を変えながら手遊びを行った。

#### 5) -2 学生の感想

「とても楽しかったので自然と笑顔になれました。」「みんなと楽しく手遊びが出来ました。」という感想が半数以上を占めた。斉唱の時とは違い、生き生きと自然な笑顔で歌えている学生が多く楽しさがとても伝わってきた。「楽しかったけど笑顔で歌い続けるのは難しいと思った。」「皆の顔を見るのは恥ずかしかった。」中には笑顔を意識するがそれが続かない学生や、笑顔だが周りとも目を合わせることが出来ない学生もいた。「手遊びは笑顔で出来たけ

ど、讚美歌では笑顔で歌えなかった。」という感想があった。楽譜を見て歌う曲であると、笑顔を意識が出来ないことも推察された。

#### 6) テスト結果

テストではリップロール、腹式呼吸、讚美歌「神ともにいまして」を実施した。103名の学生のうち101名がテストを受けた。リップロールは95名が長く出来、5名は長く出来ず、1名は出来なかった。腹式呼吸ではお腹が全く動かない学生はいなかったが、息を吸う時、肩が上がり、深く吸えない学生や、吸うのも吐くのも呼吸が浅い学生が71名あった。しっかりとお腹が使える学生は30名であった。しかし、この30名も歌では、呼吸が浅くなる傾向がみられ、讚美歌のテストで腹式呼吸が出来ていると思われる学生は3名であった。そして笑顔で歌い続けることが出来た学生は0名であったが、最後の小節になり歌が終わる安堵感で笑顔になる学生は多く見られた。笑顔で歌い続ける難しさを感じた。

#### 7) 事後アンケート結果

4回の授業を終えた後のアンケートでは103名の学生中101名から得られ、回収率は98.1%であった。**質問1**「4回の授業を終えて以前より歌が好きですか」

表6 質問1「4回の授業を終えて以前より歌が好きですか」への回答

回答	好き	以前と変わらない	以前より嫌い
人数(%)	97(96)	4(4)	0(0)

**質問2**「4回の授業を終えて以前より自信を持って歌えそうですか」

表7 質問2「4回の授業を終えて以前より自信を持って歌えそうですか」への回答

回答	歌えそう	分からない	以前と変わらない
人数(%)	81(80.2)	16(15.8)	4(4)

4回の授業ではあったが、歌うことに対して自信を持ってくれたことが分かる。元来歌が好きで学生が多かったが、声をだす仕組みや体の使い方を知ること、より理解が深まり歌うことの楽しさが広がったのではないだろうか。(表5, 6)

質問3 「授業で習った事は今後活用出来そうですか」  
表8 質問3 「授業で習った事は今後活用出来そうですか」  
への回答

回答	出来そう	分からない	出来ない
人数(%)	97(96)	4(4)	0(0)

質問3の回答では「出来ない」と答えた学生は0%であった。本格的な発声法で、戸惑いをみせる学生の姿も見られたが、即効性のあるトレーニング方法や意識を変えればすぐに変わる方法を知り、その効果が習得されたことが推察された。(表7)

### II-3. おわりに

歌への自信が授業以前と比較すると増した傾向が推察される。声を出す仕組みやトレーニングを知り、また子ども達のお手本にならなくてはいけない事を再確認したことで、楽しく歌うことや、声で表現する大切さを認識したことがうかがえた。基礎的な技能習得は大切ではあるが、今後は更に、創造的表現も伸ばしていきたいと考える。しかしながら、短期間で「歌での表現力」の習得は難しく、理解出来るが実践出来た学生は少なかった。前期の授業で興味や意識を持つことまでは可能でも、歌う力を伴うことが難しい。今後の課題は、歌で相手に伝えられる、表現出来る確実な力をつけさせることであるとする。今後も学生の立場をふまえながら、的確な授業を展開したい。(富沢)

## III. 「器楽」における授業の現状

### III-1. 授業の目的

保育者養成課程での「表現活動」の授業において、新幼稚園教育要領にある「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。」ことに焦点を当てた授業を展開する。その中で、学習者自ら体験する過程で、「表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること」を習得していく。今回は、前期の授業9回分の取り組みの中で、器楽を担当した3回分の学習とその成果について述べる。この3回の器楽の授業内容は、楽器アンサンブルを介した自己表現と他者理解である。これは「自己表現を楽しめるように工夫すること」に基づいている。自己表現を楽しむこ

とは、自己主張の一方通行ではなく、他者の存在を意識することから得られる。つまり、他者を理解することが自己表現の成長につながり、表現の幅を広げる。

そこで、器楽アンサンブルの実践を通して、表現力養成の現状と課題を明らかにすることとした。

### III-2. 授業の方法

器楽の授業は、6名前後のグループワークの体制としている。今回の、器楽アンサンブルを通じた自己表現と他者理解のために、90分授業の3回コースとした。残りの6回は、歌唱とリトミックというローテーションで授業を展開する。それぞれの分野での成果や課題を、他の分野で補完や積み重ねの学習の構築が可能となっている。

第1回目は、基礎技能の習得と位置付けた。個々の楽器の特性の理解として、カスタネット、ウッドブロック、マラカス、トライアングル、すず、タンブリンを一人1個ずつ配布し、楽器の特徴と演奏方法を、実際に鳴らしながらテキストにしたがって学習した。まず、楽器を構成する素材の違いに目を向けた。次に鳴らし方により、響きや音量、スピードの違いを実際に体験した。特に、楽器の持ち方や構え方に関しては、幼児期のあいまいな記憶しかない学生が多かった。叩いたり振ったりすれば音は出る小楽器を楽音としての価値を持たせるために、鳴らす前段階の正確な知識が必要となる。さらに、子どもの体格や成長にあった楽器の選択について学習した。楽器の中には、マラカスや鈴のように子ども用サイズがあるものもある。それらの楽器を持った感触や、楽器音が通常サイズとどのように違うかを実際に体験することで、子どもと楽器のマッチングの視点を養成した。今回、音階のある楽器は対象としなかった。そこで、単音楽器の音を奏法により変化させる手法を学んだ。これにより、楽器の変化に富んだ音から、音やモノ、風景、自分の感情など連想しながら、「表現」の幅が広がるよう示唆した。音という聴覚情報は、映像という視覚情報以上に記憶に深く結びつくことと、実体験がなくても想像力を掻き立てることができる。幼い時、幼稚園や保育園で歌った歌を耳にすると情景が鮮明に再現できる。さらには、「サンタクロースのソリが雪道を走る」音色や、「空を飛ぶ」体験など、実体験のなく

でも想像を働かせることが可能である。このような、イメージ力を高め豊かな表現力を身につける大切さを、楽器を通して体験する。この授業での学びの中で、他の分野の技能が関係していることの意識づけをした。リズムに合わせて楽器を演奏することが、体を使ってリズムを感じることや、鳴らすタイミングの取り方が、リトミックで習得した感覚を生かす必要があることを確認した。さらに、メロディーに合わせて鳴らす場合、歌の理解や“声”と同じ感覚で楽器を扱うことも指導した。

その後、子どもの歌を、器楽アンサンブル曲にアレンジする方法を教示した。まず、アレンジのための観点について「あめふり」の曲を例にして説明した。メロディーの構成と歌詞の意味を十分に理解する必要性を説いた。まず、歌詞の中で最も表現したい言葉を見つけ、そこに重心を置くことや、感情表現の見られるところをどのように表現するかを考えることの重要性を説明した。この点は、「歌唱」の分野での学びが生かされなければならない。言葉の意味やニュアンスは実際声に出して感じるができる。この経験を今回の器楽選択に活用するよう指導した。この学びを生かし、用いる楽器の種類と数、音の重なりについて考えた。この第2回目の学びから、学習者はアレンジしたい子どもの歌を1曲選び、アレンジに取り組んだ。記譜はオリジナルの記譜法を用いた。小節線の入ったリズム譜に歌詞を書き込み、その下に用いる楽器を縦に並べスコア譜の形をとった。記入した歌詞に合わせて、鳴らす個所に印をつけ、タイミングが分かるようにした。この第1回目の授業は、「知識及び技能の基礎」であることから、講義的な要素も大きく、指導者対学習者全員という学習形態であった。しかし受動的な学習のみにならないように、実際に楽器を鳴らすことや、楽譜を書く作業も取り入れた。その導入により、次の学習への進め方を示唆する活動にした。

第2回目は、新幼稚園教育要領「表現」にある、「様々な出来事の中で、感動したことを伝えあう楽しさを味わう。」という、伝えあう楽しさを味わうため、環境の設定について学んだ。「楽器を用いた表現」の多様性に目を向ける体験とした。手だてとして、各学習者がアレンジした器楽アンサンブル曲を、グループのメンバーが奏者になり演奏した。アレンジ曲は、完成形を学習者自身のイメージの中で

構築したものの、実際の音として演奏されていなかった。そこで、「情報を他者と共有する」観点から、グループの他のメンバーに自分の取り組みをプレゼンテーションすることとした。その後、実際の楽器を使ってアレンジ曲の演奏を行った。そこで、選択した曲について知ることができる。それまで知らなかった曲を、自分のレパートリーに取り入れることが可能であり、知っている曲であっても自分との解釈の違いも認識することができる。さらに、アレンジ者と奏者に分かれ対話や議論をする過程を経た。それは、アレンジ者の指示により、楽器を分担してアレンジ曲を再生する。それにより、奏者からアレンジ者に、意見や感想が伝えられ、演奏の難しい個所や違和感がある個所など、修正を求める場合も発生する。アレンジ者は、再生した演奏とイメージとの差を調整する必要が出てくる。この場合、奏者からの意見は最も重要な観点として受け入れ、工夫していく。時にはお互い納得がいかない点についてはよく話し合うというコミュニケーション力が必要となる。それを経てなお解決策が見つからない場合は、指導者に助言を求める。第2回目の授業は、このような三者による調整を繰り返す作業である。この作業が、より良いものを創ろうとする学習者の『成長過程がみえる』学習となる。また、他者のアレンジ曲を演奏する奏者という立場を経験することで、自己と他者の感性の比較が発生し、自分との違いに驚くこともあるであろう。しかしお互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり、多様な考えを理解したりする体験は重要である。このようなグループワークによって、複数の他者に自分の意見を伝える表現力も必要とされる上、他者の意見を理解する力も必要とされる。90分間で全員の曲をグループで意見交換しながらより良いものにしていくことを目標とし、臨場感と緊張感をもって活動した。指導者は、ファシリテーター的立場に徹し、協働的な問題解決の進捗状況を見ながらグループを巡回する。助言を必要とされた場合は意見を述べ、話し合いが滞っている場合は議論のポイントを整理するよう指南する。

第3回目は、新幼稚園教育要領の目指す「表現する過程を大切にして自己表現を楽しめるように工夫すること」により、「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わ

う。」ことの実践とした。第2回目で、グループ活動を通してブラッシュアップしたアレンジ曲の発表会とした。全員の曲を順に演奏し、多様なアレンジを全員で共有した。これは、『他者を意識した表現』として、自分らしい表現ができることと、他者の表現を知ることを目的とした。グループでの協働学習によりチームワークが醸成されたところでの発表は、グループ単位での自己表現力が重要となる。評価は、各曲のアレンジ力や演奏力に加え、グループでのまとまった表現力である。20分でリハーサルをして、70分で33名分の演奏を行った。同じ歌を対象としたアレンジが複数見られたが、楽器の種類やリズムのとりかた、歌とのマッチングなどの表現力が違い、多面的な価値観を知る機会となると予測した。

### Ⅲ-3. 結果と考察

方法で述べた授業を経た学習者の表現力について、目的に沿った成果が得られているかを確かめる必要がある。そこで、学習者に質問紙調査を行った。設問は3問で、それぞれの結果を報告する。

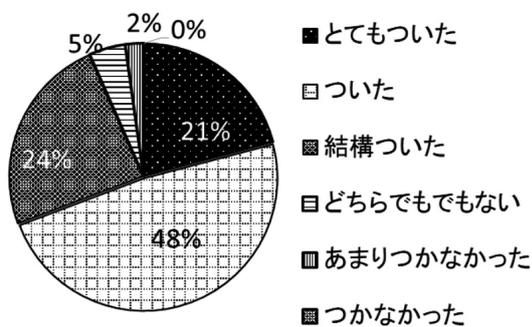


図1 自分を表現する力がついたと思うか

1. 「質問1. 器楽のグループ学習で、自分を表現する力がついたと思うか。」の質問の回答では、『ついた』、『とてもついた』が69%と半数以上であった(図1)。自由記述には、「自分で作った」、「自分で考えた」「自分なりに工夫した」、「自分らしい表現」など、「自分」という言葉が多くみられた。楽器を使った活動については、「それぞれ楽器の音が違うので、楽譜に合わせて考えるのがとても楽しかった。」、「自分で作ったリズムに合わせて楽器を弾くのがたのしかった。」、「楽器の音を聞いて、この音はどういう気持ちの時に使うかを考えることができた」、「楽器にあった演奏の仕方を学べたから」、「歌詞の意味を読み取って楽器が考

えられた」などが述べられていた。このことは、楽器の音を実際に鳴らす事により「モノ、風景、自分の感情など連想しながら、「表現」の幅が広がる」に該当する学びがみられたと推測する。『あまりつかなかった』が2%あったことについて、自由記述は「やりたかったです」が一件と無記入であった。この1件の自由記述から、意欲は見られたが、何か達成できなかった要因があったと推測できる。楽器指導の実践は一斉指導の形態であることから、個別の困難さや課題の見極めと対応の必要性が見られた。しかし、ほぼ全員が表現力の向上を実感できたことは成果と捉えることができる。

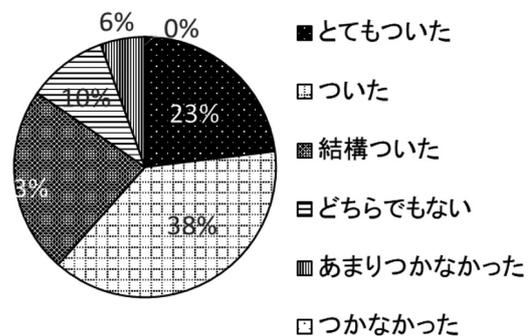


図2 他人を理解する力がついたと思うか

2. 「質問2. 器楽のグループ学習で、他人を理解する力がついたと思うか。」の質問の回答では、『ついた』、『とてもついた』が61%あった(図2)。これは、同じ実践を受講していても自分とは違う演奏手段や表現の違いに気づくことであり、一歩踏み込んで「他者の表現を受け入れようとする姿勢」が育っていることと捉えられる。第1章総則第2(10)豊かな感性と表現の記述の中にある「友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲を持つようになる。」ことに目を向けられる指導者であるための実践と位置付けられている。自由記述の「人の作った音楽を弾くのは楽しかった」、「自分にはない発想を知って「すごいな」と思うときがあった」、「他の人の様子を近くで見ることで、力がついたと思ったから」、「みんなのアイデアを見て「なるほど、ここではこの楽器を使うんだ!」と学べたので、他人を理解する力がついたと思います。」、「自己中心的に考えなくなった。」などから、一緒に演奏をしたことでの観察が理解に有効であると推測される。一緒に演奏を行う場合は、グループ

の構成と規模が重要と考えられる。クラス全員をランダムな6名程度のグループにしたことで、友人関係がない学習者が1つのグループとして活動をするという緊張感の中での学びであったことに意味があると考えられる。反面、他者との接触が日頃から困難と感じている学習者も少なくないことから、「どちらでもない」と「あまりつかなかった」が16%であったことにも目を向けなければならない。自由記述には、「他人を理解することほど難しいことはないです」という対人関係を築くことの根本について述べる学習者もあった。そのほかには、「自分ばかりでした」、「少し難しかった」、「周りの音をきいて合わせるのが難しかったから」といった挑戦しようとしている姿勢が見られたことや、「あまり他人の理解をすることより、自分のことで精いっぱいだった」といった振り返りは、この観点は重要であるという気づきにはなっている。これらの他者理解の途中であると捉えられた様子について、継続が重要と示唆されている。今後学習で繰り返すことによる効果が期待できるであろう。

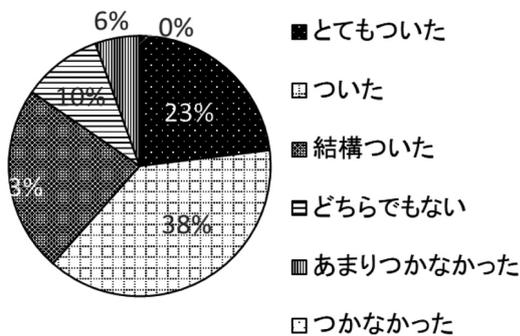


図3 仲間と意見を出し合える場ができたか

3. 「質問3. 器楽のグループ学習で、仲間と意見を出し合える場ができたと思うか。」の質問の回答では、『とてもなった』、『なった』が68%あった(図3)。自由記述には「演奏を通じて」という言葉が多く見られたことから、演奏という活動の特色とも言えるであろう。しかし、『あまりならなかった』『ならなかった』は2%で、そのうちの自由記述では「リズムについて学んでいるときに少し生かされた」、「特に思わなかった」、「ほとんど何も考えずにやっていた」と記述されており、授業開始前の目的を明確に伝えることの重要性が示唆された。

### Ⅲ-4. まとめ

平成30年学習指導要領・平成29年度告示の幼稚園教育要領を実現できる指導者自身の表現力の養成を、器楽の授業実践をとおして学習成果をみた。表現の領域の一部ではあるが、音楽による表現力育成は改めて有効とわかった。この器楽の実践が、3つの分野(器楽・歌唱・リトミック)のローテーションとして相乗的効果を上げる構成のなっているかを、さらに検証する必要がある。(杉山)

## Ⅳ. 「リトミック」における授業の現状

音楽に限らず、人間生活にとり、「良いリズム」は生きる土台となる基礎である。保育者を目指す学生たちが、「良いリズム」を持つことは、リズムカルな動作、テンポの良い動作など、日常生活の場面においても、活かすことのできる大切な要素であると考えられる。それらをふまえ、以下の2つの課題を提示し体得できるよう試みた。一点目は、テンポを一定に保持できる「拍感」の習得。二点目には、様々な音価の違いに気づく「基礎リズム」の習得を目指した。方法としてリトミックを用い、将来子どもの表現を導き出す指導に結び付くことが出来るよう、身体を用いたリズム表現(拍と4分音符=いぬ、2分音符=うし、8分音符=ねずみ)を毎回の授業で行った。また、拍と基礎リズムを同時に表現(左右の手、手と足、2人組)することも試みた。学生たちは回を重ねる毎に、課題を習得しながら自己を開放し、仲間と笑顔で表現することを楽しむことが出来ていたように拝察された。

前期最終授業において、前期のまとめを実施した。振り返り内容は以下の3点である。①拍について ②基礎リズムについて ③授業の感想 また、本論である表現力、リズム感の向上についての自己評価をアンケート調査として実施した。方法、結果、考察について次に述べる。

### Ⅳ-1. 方法

対象者：幼児教育学科1年受講生(103名)

回答率100%

日時：2017年7月 授業時間内

調査内容：以下について質問した。質問内容は「この授業を受けて、表現力、リズム

感は高まりましたか」とし、5段階評価数値に○をつけ、その理由を記述させた。

## IV-2. 結果と考察

表9 質問「この授業を受けて、表現力、リズム感が高まりましたか」への回答

回答	おおいに高まった	高まった	わからない	高まらなかった	全く高まらなかった
人数 (%)	48 (46.6)	53 (51.5)	2 (1.9)	0 (0)	0 (0)

理由（一部抜粋）：

・この授業によって、身体を大きく動かして、行動して、その歌の歌詞にあった動きを表現したり、手をたたいて、ピアノにあわせてリズムをとることを楽しくでき、両親や兄弟に学んだことを見せたり、自慢したり出来たから。・リズムにのって楽しむことで、表現する力を身につけることができたと思いました。この授業を通して、音楽がより好きになって、表現することが楽しいと感じるようになりました。自分のことをさらけ出すことは、恥ずかしいと思っていたけど、表に出すことで、前向きになれるような気がしてきました。

調査結果では、98.1%の学生が受講の結果、表現力、リズム感が高まったと回答した。また、その理由にも記述されているように、学生たちにとり、自己を解放させ、身体を伸び伸びと動かし、リズムカルに表現することが大切であることを、再認識するとともに、そのための手立てを習得することで、第三者に伝えたり、今後更に、前向きに努力したりしたいという決意もみられたことは、成果あったと推察された。（岡田）

## V. 授業全体について

「音楽表現活動Ⅰ」の最終授業では、次のようなアンケート調査を実施した。

### V-1. 方法

対象者：幼児教育学科1年受講生（103名）

回答率100%

日時・場所：2017年7月20日（木）9:10～10:40

：10102教室

調査内容：以下の3項目について質問した。質問

①②については6段階評価数値に○をつけ、その理由を記述させた。また質問③については、自由記述とした。

質問①3つのオムニバスの授業（歌、楽器、リトミック）によって“表現力”がついたと思いますか。

質問②3つの授業内容（歌、楽器、リトミック）が学びの“連携プレー”となっていましたか。

質問③授業についての内容を振り返り、気づいたことや感想を自由記述してください。

## V-2. 結果と考察

表10 質問①への回答

回答	とてもついた 6	5	4	3	2	つかなか かった 1	無回答 (欠席者 を含む)
人数 (%)	24 (23.3)	41 (39.8)	22 (21.4)	5 (4.9)	0 (0)	0 (0)	11 (10.6)

理由（一部抜粋）：

・どの授業も回数を重ねるにつれて、リズムのとり方や表情のつけ方などのコツがつかめるようになったから。・歌うのに、自信がなかったが、歌うことに自信ができました。音楽の表現力や、楽器を演奏する楽しさを学べたので、表現力がついたと思います。

調査結果からは、過半数以上の学生が“表現力”がついたと回答している。

表11 質問②への回答

回答	とても ついた 6	5	4	3	2	つかなか かった 1	無回答 (欠席者 を含む)
人数 (%)	19 (18.4)	41 (39.8)	21 (20.4)	9 (8.7)	2 (1.9)	0 (0)	11 (10.6)

理由（一部抜粋）：

・この3つを合わせたら、音楽の表現力が身につく、良い保育者になれると思ったからです。・週変わりで学ぶことで実践しながら学べた。・週ごとに違う刺激が得られた。・いつも違うことができて楽しかった。・この3つができることで、音楽についてのがつくとと思うので、連携が出来ていたと思いました。

調査結果からも、約半数の学生が、学びの“連携プレー”になっていたと回答している。

質問③について（一部抜粋）

・歌ではリップロールをしたら、本当に歌いやすく

なったので、長くは続かないが、暇な時に練習してできるようにしたいと思いました。・楽器演奏も自分達で曲に音をつけて皆で表現するのがとても楽しく、保育者になったら子どもに教えていきたいと思いました。・リトミックでは、基礎リズムと変化のあるリズムを学び、その2つを組み合わせると、様々な音楽が生まれると気づきました。「ねずみ・いぬ・うし・うま」という動物に例えて教えてくださいだったので、とてもわかりやすかったです。

以上のような記述からも、それぞれの内容から、保育者に必要な“表現力”を技術の習得とともに、子どもの指導法につなげる視点を持ちながら学ぶことができたと推察される。(岡田)

## VI. おわりに

「音楽表現活動Ⅰ」における、3名の教員の授業展開の現状を明らかにした。今後の課題として、更に授業内容の教材研究にも視点を当てる事が挙げられる。例えば、共通教材を取り上げ、学生ひとりひとりの表現力の変化を継続的に捉えていくという

ように、更なる連携が必要であろうと考える。今後も、お互いの授業について連携を密にし、内容、教材、方法などの検討を進めていきたい。(岡田)

## 引用文献

- 幼稚園教育要領・保育所保育指針(平成29年度告示)  
坂田 直子・山根 直人・伊藤 誠(2009)保育者養成における音楽的専門性の育成 - 幼稚園教師へのピアノ等鍵盤楽器に関する質問紙調査を手がかりに - 埼玉大学紀要 教育学部 58(1): 15-30
- 若谷 啓子(2017)保育者に求められる音楽能力について - 保育者アンケート自由記述から探る - 全国大学音楽教育学会第33回全国大会〔大会要項集〕P.28
- 鶴巻 保子(2012)保育者養成のための音楽表現技術における学生の学び 鹿児島純心女子短期大学研究紀要 第42号 57-69
- 普光院 亜紀(2015) 共働き子育てを成功させる5つの鉄則 集英社 p.152